松田二郎先生の3つの文章

阿部博行

2月27日、荘内日報社の橋本政之社長より松田二郎先生逝去の報がありました。21日、先生の91歳の誕生日に電話し、奥様より入院中と聞いてから一週間でした。

5年前の前田光彦先生と今回の松田先生の死に、大きな喪失感を覚えます。

私が読んだ先生の30代の文章を読み返し、紹介することで追悼の気持ちを表したいと思います。

私は高校2年の時（1964年）に、先生から「現代国語」を教わりました。『チボー家の人々』や宮沢賢治「永訣の朝」は印象に残っています。訛りのない、やや早口の語り口を今も思い浮かべることができます。

私たちのクラスでは年生の終わりに『夜明け』という小冊子を作りました。それに先生は「夜明けの歌」という文章を寄せてくれました。当時流行っていた岸洋子の「夜明けの歌」の歌詞についての批評です。

「私の心のあふれる思いをわかっておくれ」については、「あふれる思い」があったら、皆にわかってもらうよう積極的に努力すべきで、人前で大いに話し、自分の意志や感情を鍛錬に他の人に伝えられるよう努力してほしい。

「小さなしあわせ守っておくれ」については、全てと妥協して適当に生きてチッチャな幸せを守ってもらってもどうしようもない、大きな幸せをつかむために生きなければならない、「どうかチッチャク固まらずに、スケールのデッカイ人間になって下さい」と。とかく引っ込みがちな私たちを、叱咤激励する文章でした。

1960年代後半の大学は、学生運動の激しい政治の季節でした。一般学生の中にも、じっとしていられない空気が流れていました。68（昭和43）年、私たち高校同期を中心に『狼煙』という同人雑誌を作りました。やがて学生寮「荘内館」の佐高信・菅原直善両先輩が同人に加わり、高校時代の恩師松田二郎・逸見大吉郎両先生が会員として寄稿してくれました。第2号の特集が「私の一冊」で、先生の「堀田善衛『河』」が載っています。

先生は堀田が、日本の伝統的な美、無常観に異打ちされた美、死に馴れ親しんだ美、はかなく脆い美を、人間の努力を正視したがらない、無責任な美感として拒否し、美を素朴、粗野そのものであり、未完成なもののみが有する偉大な未来性とともに、死にそうなものは生きかえらせ、それを未来に対する希望の礎にすることこそ歴史というものと主張していることを高く評価します。そして最後に「『河』における堀田のたくましい美学と、激しい息づかいを、私はいつまでも鮮明な記憶に託することができる」と書いています。

私が高校に勤め、組合員としても一歩を踏み出したのは、71（昭和46）年4月です。『山形高教組新聞』（71年11月5日）の特集が「中教審路線とわたくしの教育」で、先生（鶴岡南高分会）の「『チョクゴ』体制へもどす中教審　弁当箱に寄う毎日」が載っています。すぐ下に、佐高信さん（酒田工業高校分会）の「使いすての思想　中教審路線はスクラップ化路線」の文章があります。

先生が毎日ぶら下げて職場に通っている色の悪いアルマイトの弁当箱は、小学生時代の30年ほど前に「お国のため」に鉄製玉になるべくペシャンコにつぶされた前歴がありました。愛着断ちがたくそっと隠して供出せず、戦後にたたいて広げた弁当箱。そして、弁当箱によって小学校時代の思い出として、天長節の式の予行で「チョクゴ」と号令をかけられた時、隣と足を踏み合ったりをし先生にぶんなぐられたこと、「チョクゴ」を毛筆で書かされた時、まじめをこめて書けと何回書いても合格せず、遅くまで残されたこと、「チョクゴ」はとても恐ろしかったと回想しています。

日本の教育を戦前の「チョクゴ」体制にもどそうとしている中教審の答申に対して、「私は戦争を忌避し、ほんとうの平和を教える教育者になることを、毎日私の弁当箱に誓っている」と結んでいます。

先生の文章は30代にして今に一貫していますが、私は先生の思想・生き方の根底にあるのは、東京大空襲に遭い、親とはぐれ、飢えと寒さの中何日間も逃げまどった強烈な体験であると思います。私たち「地元の戦争体験者の証言を記録する会」では、一昨年の秋、先生の戦争体験を映像におさめ、教材に使ってもらう取り組みをしました。先生の平和への思い、戦争への怒りは語り継がれることになります。

松田先生、世界は「戦争の世紀」であった20世紀から「平和の世紀」をめざす21世紀になっても、戦争という愚行を繰りかえしています。先生の教えを胸に刻み、「戦争を忌避し、ほんとうの平和」をめざす努力をしていきたいと思います。

松田先生、いろいろ教えていただき有難うございました。

（鶴岡市美原町）

2019年11月「古典の日」の集いで講演する松田先生